

# 考古学の文化領域論

——土面の遺跡組成論をめぐって

磯前 順一

## 1 はじめに

大正時代に日本考古学が先史人類学から分立して以降、文化領域という概念はこの学問にとって重要な意味を持ち続けてきた。考古学の基礎をなす方法論である型式学は、同一型式の分布域を一文化圏として捉えることで、日本列島を、その下位地域として複数の地方差を抱えながらも、日本文化という一つの同質な文化圏を構成するものであるという理解を提示してきたのである。このような日本文化を単一文化として斉一的に捉える理解は、日本が植民地を放棄した戦後社会により一層支配的な自己理解として受け入れられるようになり、考古学は日本人の歴史的アイデンティティ確立にきわめて重要な役割を果たすようになったのである。

しかし、ここでそのような理解の前提とされている〈同一の型式の分布圏〉が果たして本当に同質性に貫かれたものであるのか、それ自体が根本から検討されたことはほとんど皆無に近いことであった。考古学者は型式学という方法を前提として、同質の文化圏を措定してきたわけだが、そもそもその同質性が考古学者による概念操作の結果として抽出されてきたものであることは、言説論に馴染んだ今日の学問的状况からすれば当然のこととも言える。そして、そのような同質性がナショナル・アイデンティティの構築と密接な関係を有する政治性を負ったものである以上、むしろ今日の考古学の抱える課題はこのような型式学の描き出す同質性と表裏一体をなすかたちで、差異が実際の遺跡においてどのように存在しているのか、同一性と差異の関係性を明らかにすることのほうが重要であるとも言えるのではなかろうか。

このような視点に立つとき、一つの均質な文化として捉えられた同質な相のもとに、差異がどのように絡み合って存在するのかという問題は、そもそも文化というものが同質性としてのみ存在し得るのか。むしろ現実には異なる要素の接触領域として存在しているのではないかという問いに導かれていくはずである。そのとき、従来、同質な文化領域を支える拠点と見なされてきた個々の遺跡もまた、異なる文化要素のせめぎあう同一性と差異の絡み合う空間として捉えなおされるはずである。そのとき、メアリー・ルイス・プラットが『帝国の眼差し—旅行記と脱文化領域化』(1992年<sup>1)</sup>)で試みたような、異なる文化要素がせめぎあう場の動態はどのようなものなのか。そして、そもそも文化という単位自体

がどのように構築されたものなのか、という思索へと導かれていくはずである。

## 2 仮面研究の現在

縄文時代の仮面研究は、1898年の坪井正五郎「石器時代の仮面」(『東洋学芸雑誌』197)によって先鞭がつけられ、1991年の拙稿「縄文時代の仮面」において編年案(表1)および意味論の大枠が提示された。その後、縄文時代の仮面は67遺跡から出土した100点を超すに至ったが<sup>3)</sup>、現時点では編年の枠組みそのものが大きく組み替えられることはない。ただし、幾つかの型式の時期認定に関して議論がみられ、なかでも、近年における貝製仮面の精査および西日本出土の土面の増加は日本における仮面発生の問題を本格的に論ずるうえで欠かせないものである。また、青森県二枚橋(2)遺跡から出土した一群の遮光器型仮面もまた、遺跡における仮面型式の存在形態を考察するうえで重要な手がかりになると思われる。

これらの研究の流れを踏まえ、まず縄文時代の仮面一般の概説を、かつて拙稿で示した見解に補正を加えて述べておきたい。縄文時代の仮面は、縄文後期初頭の朝鮮半島南部から九州西北部の貝面<sup>4)</sup>としてまず現れると考えられる。続く後期前葉には、瀬戸内海湾沿岸から近畿地方<sup>5)</sup>、さらには東海・中部・北陸地方から東北部地方にかけて、土面の分布圏が東上していく<sup>6)</sup>。これらは、いずれも実際の人間の顔に装着可能な大きさで作製され、内側から外が眺められるように眼部および口部に孔が穿たれている。そのなかで、朝鮮半島南部から九州西北部の貝面が縄文中期に遡るという見解も提出されており<sup>7)</sup>、もしそのこと

表1 仮面型式編年案

	西九州	近畿	東海	中部	北陸	関東	東北南部	仙台湾岸	北上川 中流域	馬淵川 流域	岩木川・米代川 雄物川流域	北海道
後期前葉	(阿高型)	仏並型	(川地型)	(下中原型)	真脇型	(+)	愛谷型					
中葉		A 類型				(+)	(沼津型)					
後葉							B 類型	(沼津型)	部位型			
晚期前葉								中沢目型		A 類型 (鼻曲がり) 第1類	C 類型	
中葉						発戸型 後谷型	←		遮光器型 第1類 第2類	鼻曲がり 第2類	遮光器型第1類 第2類	
後葉											D 類型	ママチ型

表中の仮面名称は型式名(仮称)である。( )はその時期が不確実なことを指す。地域区分は便宜的なものであり、各仮面形式の分布の実態を示すものではない。「→」は影響関係を表す。また、時期、各形態類型の区画線は現存する資料のみから設定したものであり、絶対的なものではない。

が確認されるならば、仮面の発生は玄界灘をはさむ朝鮮半島南部から九州西北部という環玄界灘文化圏に求められる可能性も出てこよう。一方、貝面を除外して土面のみで考えるべきだという見解も出されているが、両者の関係は仮面という儀礼の枠組みのなかで材質転換現象として考えられるべきものであり、その結果、近代ナショナリズムが作り出した〈日本列島＝日本文化〉という枠組みに収まらない分布現象を持つものとして、あるいは少なくともそのような可能性をはらんだ文化動態として、仮面を通して縄文文化に接近すべきであろう。

この後期前葉に分布する仮面はその断面形から二系統に分けられる。一つが実際に顔に直接被れるように断面を湾曲させたものであり、貝面の分布する朝鮮半島南部・九州西北部から、土面の分布する中部地方にかけてみられる。もう一つは直接着装するにはいささか困難のある板状の断面を有するものであり、北陸や関東さらには東北南部にみられる。しかし、徳島県矢野遺跡や大阪府縄手遺跡の土面は板状の断面を有しており、貝面にしても小型の板状のものが存在しており、その断面形は地域によって多様なあり方を示すものとする方が現在では妥当であろう。

そして、後期中・後葉になると土面の分布域は北上していき、仙台湾岸から北上川中流域に移行していく。仙台湾岸では後期前葉の北陸から東北南部にかけての土面と同様に、板状の断面を持つ実物大の土面が作られる<sup>8)</sup>。北上川中流域でも実物大の仮面が作られていたと考えられるが、土製品として作られていたのは鼻・口・耳の各部位形土製品であり、それを布や革などに縫い付けて仮面を作り出していたと思われる。ちなみに、この部位型土面の時期については、安孫子昭二と金子昭彦が、かつて筆者が推定した後期後葉でなく、後期中葉を中心とする時期に求めるべきだとしており<sup>9)</sup>、もしそうであるならば後期中葉の仮面は、土製品から見ると、異型式のものが仙台湾岸と北上川中流域に並存したことになる。一般に、仮面は分布域を東漸させていく傾向にあるが、現在ではこの部位形土製品のうち、いずれも耳形土製品が新潟県原遺跡と長野県滝沢遺跡からも発見されており、ひとたび北上川中流域で成立したものが南下していった可能性が考えられる<sup>10)</sup>。また、九州西北部の貝面にしても中期あるいは後期初頭から後期中葉に至るまで、三形式にわたって継続していたことが想定されており<sup>11)</sup>、分布が広がっていった後も、もとの地域でも仮面儀礼がしばらくのあいだは継続されていた可能性も想定される。

晩期になっても前葉までは仙台湾岸には後期の板状土面と同じ形態に亀ヶ岡文化の意匠を備えた中沢目型土面がみられるが、晩期中葉になると北上川中流域・馬淵川流域・岩木川流域・米代川流域・雄物川流域に目・口孔を穿たない小型の遮光器型土面が出現する。その断面形は大洞 C1 期の第一類では湾曲を呈するが、大洞 C2 期の第二類になると裏面にも文様を刻む板状のものもみられるようになる。土面の製作数も増加し、青森県二枚橋(2)遺跡のように一遺跡から20点にも上る土面を多量に出土する遺跡も現れるようになる。また、この遮光器型土面に加えて、馬淵川流域から下北半島にかけての地域では後期後葉になると、湾曲した断面を持つ人面大の土面に目・口の孔を穿った鼻曲がり型土面が出現し、大洞 C1 期には岩手県葺前遺跡のように遮光器型土面と並存する。現在のところ、鼻曲がり型土面は馬淵川流域を中心とする地域以外にはみられない当該地域固有の型式と考

えられるが、一方で遮光器型土面は亀ヶ岡式土器や遮光器型土偶と同様に東北地方の範囲を越えて、北は北海道から南は関東地方まで、少数ながらも広い分布域を示している。それは、たとえば同じ遮光器型土面第一類でも、栃木県寺野東遺跡出土資料のように目孔を穿った人面大のものもあれば、埼玉県発戸遺跡出土資料のように目・口孔を穿たない人面大のもの、茨城県真崎貝塚出土資料のように小型で目・口孔に加えて額に孔を穿ったものなど、その型式受容のあり方は多様かつ流動的である<sup>12)</sup>。

これらの動きを大まかにまとめるならば、後期前葉に玄界灘をはさんで朝鮮半島南部と九州西北部の環玄界灘文化圏に発生した貝面、そして瀬戸内海湾沿岸から近畿地方、さらには東海・中部・北陸から東北部にかけて現れた土面がまず縄文時代の仮面文化を作り上げる。その後、後期中・後葉になると、分布域を仙台湾岸から北上川中流域へと東漸させていくが、これらはいずれも人間の顔に近い大きさで作られ、目孔を有することからも着装することも可能な仮面であったと思われる。しかし、その後、晩期になって東北半部の北上川中流域・馬淵川流域・岩木川流域・米代川流域の各地域に土面の分布が拡大していくと、目・口孔は塞がれ、大きさも人間の顔よりもかなり小型のものへと変化していく。そのなかで、馬淵川流域のみは人間の顔に着装可能な大きさの目・口孔を穿った土面を並存して作り続けるが、土面の最終段階にあたる晩期中葉にはそれも消滅してしまう。その意味では、仮面とはその分布域を日本列島に沿って東漸させながら形状を変化させ、着装可能なものから飾るものへと儀礼の性質を変化させていったと考えられる。

そのような仮面の分布を考えるさいに、当然のことながら問題になるのが各地域での土偶の顔部表現との対応関係である。まず、九州西北部から北上川中流域までの仮面は、顔部表現の一致か否かを問題にする以前に、地域によっては熊本県阿高貝塚や徳島県矢野遺跡のように土偶の存在しない場合もあれば、土偶が共存する地域もある。後者の場合でも、福島県愛谷遺跡出土土面や北上側中流域に分布する部位形土製品のように、明らかに土偶の顔部表現と共通すると判断可能な場合もあれば<sup>13)</sup>、はっきりと断言できない場合もあり、土偶との対応関係は地域において様々であった。おそらく、それは西日本における顔部表現をめぐる禁忌の存在を伊藤正人が想定しているように、各地域における文化的意識構造の違いを反映するものと考えらるべきであろう。

### 3 遺跡における遺物組成(1)―土面のあいだ

すでに触れたように青森県むつ市大畑町の二枚橋(2)遺跡は、20点の遮光器型土面（第一類12点・第二類8点）および約180点に達する土偶を出土した遺跡として特筆される<sup>14)</sup>。とくに土面は、このように一遺跡から多量の資料を出土した例は部位型土製品を除いては存在せず、それが特異な例なのか、遮光器型土面に一般化できる例なのか、今後の考察がまたれる。下北半島に位置する二枚橋(2)遺跡は、その場所から言って基本的には馬淵川流域の土面や土偶と強い類似性を示すものの、同じ下北半島の上尾駱遺跡出土の鼻曲がり型土面が馬淵川流域のものとは逆曲がりの鼻を有するように、馬淵川流域とは異なる固有性もみられる地域に属する。

以下、本稿では二枚橋(2)遺跡出土の例を通して、個別の遺跡における土面の存在形態を具体的に明らかにしていきたいと思う。拙稿「縄文社会の仮面」では各遺跡から出土した資料をもとに理想型として型式編年の設定を試みたわけだが、ここではその型式編年案をもとに逆に具体的な遺跡という場において土面がどのようなかたちで存在していたのかを考えてみたい。遺跡の出土状況と型式をめぐる関係について、大塚達朗は「層位は存在論的に型式に先行し、型式は認識論的に層位に先行し、かつ、相互に他を前提とするという意味での循環関係にある<sup>15)</sup>」と述べているが、それは型式というものが遺跡の層位から抽出された理想型にほかならず、考古学の研究目的はそのような理想型の設定を絶えず更新していくと同時に、その型式を手がかりにして諸型式がどのようなかたちで各遺跡において共存していたのかを解明する作業も推し進めていかなければならないことを示している。とくに各遺跡の存在形態を記述する報告書においては型式という理想型を念頭に置きながらも、遺構のみならず遺物組成の特長に関しても「層位は存在論的に型式に先行」するという事態に主眼を置く必要がある。層位から型式というベクトルが現実が理念へと抽象化されていく過程であるとすれば、型式から層位へとというベクトルは理念が現実へと具象化されていく過程として捉えられなければならない<sup>16)</sup>。

まず、二枚橋(2)遺跡における土面の出土状況を論じる前に、その前提知識として、遮光器型土面の各流域における地域性について触れておこう。ここでは便宜上、二枚橋(2)遺跡出土資料の中心を占める遮光器型第一類土面を中心にその特色を概観する。まず、既述してきたことの再確認になるが、遮光器型土面第一類はおおよそ大洞 C1 期に北上川中流域以北の東北北半部がそれ以南の地域に対して共通の仮面儀礼を有するひとまとまりの地域であることを示している。ただし、同じ遮光器型土面第一類といっても、東北北半部のなかで幾つかの地域的な特色がみられる

(図1)。資料数が十分ではないため強引な推測にならざるを得ないが、米代川流域では外形が円形で耳部を欠くのに対し、北上川中流域では菱形の顔の輪郭に写実的な耳部をもち、岩木川・雄物川・馬淵川では両方の折衷様式をもつ。北上川中流域を中心とする耳部をもった遮光器型仮面の存在は、後期中葉あるいは後期に出現した部位型土製品の耳部表現の流れを引く可能性も考えられる。そして、馬淵川では遮光器型土面のほかに、直接の着装を可能とする目・口孔を穿った人面大の鼻曲がり型土面を併せもつ。仮面の表情の相違や異型式の並存は、東北北半部の各河川流域で仮面に込められた精霊の

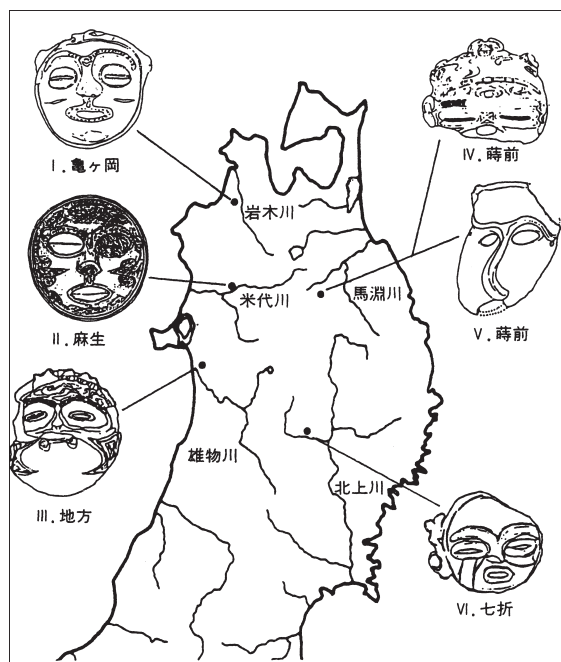


図1 大洞C1期における東北北半部の仮面  
I～IV. VI. 遮光器型土面第一類, V. 鼻曲がり型土面

イメージが異なっていたことを示しており、このような東北半部における仮面型式の共有とその内部での差異の並存は、東北半部における緩やかな文化的同一性の存在を前提としたうえで、各河川を単位とする固有の文化的同一性が存在したことを物語っているもの<sup>17)</sup>と考えることができよう。

さて、二枚橋(2)遺跡は5,784平方メートルが発掘され、台地上の2箇所の集石遺構（縄文晩期後半）を中心に、その周囲の斜面の遺物包含層から構成されている。層位は第Ⅰ層から第Ⅵ層に大別され、そのうちの第Ⅳ層が土面や土偶を含む縄文晩期の遺物包含層に相当し、さらにそれがB-1層からB-4層の4層に、それぞれのあいだに遺物をあまり含まないY-1からY-4層をはさむかたちで細分される。20点の土面のうち、最も新しい第ⅣB-1層から出土したものが10点（同一個体として認定できる資料が2点あるので、以下、9点として算定する）、以降、年代が古くなるに従って、第ⅣB-2層のものが1点、第ⅣB-3層のものが2点、第ⅣB-4層のものが2点である（図2）。他の土面は明確な層位認定が困難なものである。ただし、この第Ⅳ層内の層位細分については、異なる層位から出土した土偶片が数点ばかり接合していることから、完全に断絶した時間差を示すというよりも、漸次的な時間の変化相を示すものと考えべきであろう。

この細分に従った同一層位から出土した土面の組成を復元してみると、図2に明らかのように、第ⅣB-1層では遮光器型土面第一類が6点（図2-1～6）、同第二類が3点（図2-7～9）。第ⅣB-4層でも同第一類（図2-13）と同第二類（図2-14）が各1点ずつと、型式編年としては時期的に新旧関係にあるものが共存していることが分かる。つまり、第Ⅳ層の時期を通して、終始、遮光器型土面第一類と第二類は実際には二枚橋(2)遺跡において併用されていたということになる。ただし型式的にみれば、遮光器型土面第一

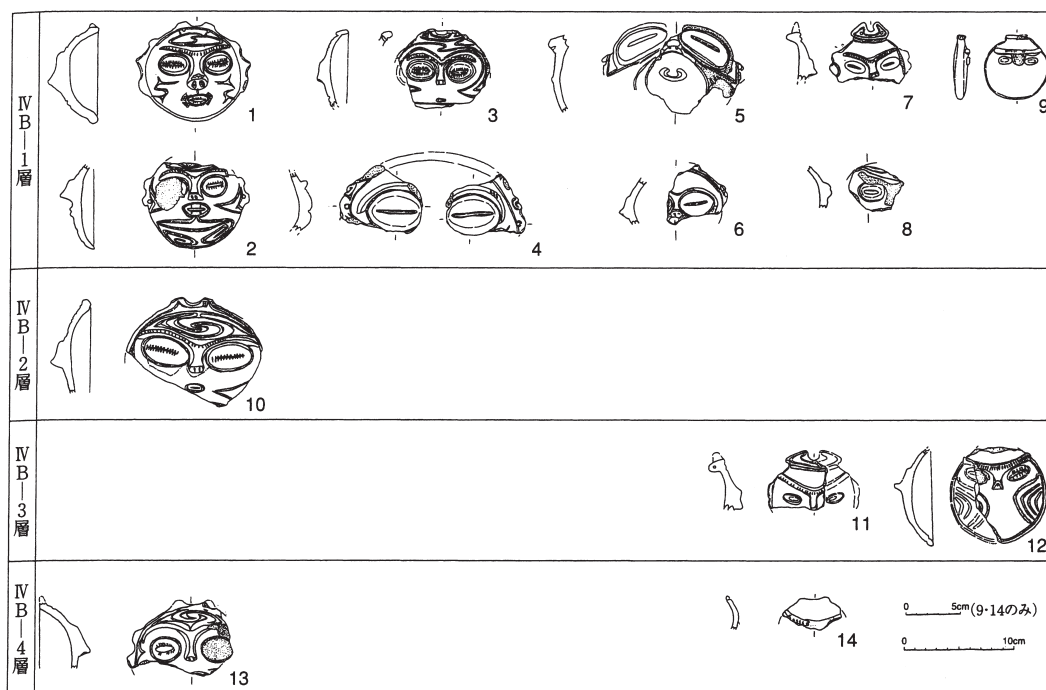


図2 二枚橋(2)遺跡出土の土面（出土層位の明確なもののみ。藤沼ほか 2002を改変）

類と第二類は明らかに新旧の編年関係にあり、同一型式を構成する下位型式とは考えることはできない。現代の社会の例に喩えて言えば、平成の街並みを構成する建造物のなかには、平成の時期に築造された最新様式の建物も存在すれば、昭和50年代や昭和30年代の建物もちろほらと混じっていることであろう。場合によっては戦前の昭和初期のものや大正期のものもごく少数ながら含まれていることさえある。そのような別様式の並存は、現在の道路を走る様々な自動車の種類を調べても容易に領くことのできることであろう。

再度確認するならば、型式とはあくまで現実から抽象化された理念型として提示されたものであり、それが実際に遺物として具現化された現実を目を遣るならば、依然として古い型式を好んで使い続ける者もいたであろうし、あえて古い型式のものを新たに製作する者さえ存在したことが考えられるであろう。そもそも、実際の遺物に型式の典型的要素を完備した個体を見出すことは困難であり、構成要素のなかに時間的に新しい要素や逆に古いものを取り込んで個体として成立しているのが実情なのである。

同様のことは、地域差に関する様相についても見て取ることができる。たとえば、北上川中流域と米代川流域で鮮明な対称を示す写実的な耳部の存在の有無は、写実的とは言えないまでも耳部を備えたものが主体をなす一方で（図2-1～2・4～7・11・13）、米代川流域と同様に耳部を有さないものも存在する（図2-3・9・10・12）。第二類における断面の湾曲（図2-7・11）と板状（図2-9）といった違いも、同様の地域差の反映である。ただし分布圏からみれば、鼻曲がり型土面もこの遺跡の土面組成として十分にその存在が想定される場所であるが、現時点ではいまだ遺物としては発見されていない<sup>18)</sup>。

また、明確な時期差や地域差とは言い難いものであっても、眼部の刻目の有無、額部や顎部文様の有無、人中の有無など、様々な個体差は枚挙にいとまがない。ただし、その一方で第IV B-1層出土の土面については、朱塗り（図2-1・3～7）、耳孔や額孔（図2-1～5・8）、胎土の類似を含めた薄肌色の焼成などの共通点の存在から、これらの土面がいずれも二枚橋(2)遺跡の母体をなす同一の共同体によって作製されたことも推察される。大塚達郎が指摘するようなキメラ土器に相当する土面や異系統の型式がみられないことから、この共同体の外部地域からの人の移動や文化の影響は、現在までに発掘された土面からは明確なたちでは確認することができないと言えよう。だとすれば、土面間にみられる時間・地域差を含む個体差は、同じ共同体に属する構成員間の型式理解をめぐる相違から発生したものと捉えることができる。

従来、個体間の相違は同一型式内の多様性として型式という理念型の同一性のもとに解消されてきたが、実際の遺跡における遺物の存在様態に着目する観点に立つならば、このような差違は現実の共同体構成のあり方を反映したものとなる。すでに幾度も触れたように型式というものは理念型であり、極論すればその理念と合致する現実の遺物は存在しない。哲学者のジャック・デリダが「純粋な統合あるいは純粋な多様性——もし全体性や統合だけが存在するとして、また、もし多様性や解離だけが存在するとしての話ですが——は、死の同義語です<sup>19)</sup>」と述べているように、いかに共同体規制の強固な原始的共同体であっても、すべての構成員の観念が完全に一致するような単純な同一性は、その正反対の

純粋な差異性と同様にそのままでは存在し得るものではない。現実の遺物は、その幾つかの部分それぞれのカタチで備える一方で、それ以外の要素を欠落させたり、そのなかに年代差や地域差の要素を含みこむことで存在している。一点として完全に同じ顔部表現が存在せず、相互にずれている個体を積み重ねていくことで、決して現前する個体のない理念型として浮かび上がるものが型式であり、それが共同性という理念的紐帯なのである。ただし、現実の構成員に具現化される共同性はそこにすべての個人が完全に同化されてしまうような均質なものではなく、個々の立場から理念的な共同性を読み換えるカタチで差異化されていく。哲学者の松葉祥一は、ジャン＝リュック・ナンシーが「共同体の分有」<sup>20)</sup>と呼ぶその事態を次のように説明している。

ナンシーにおける共同体とは、合一なき分割＝共有、共通性なき共同体、「融合なき共存」である。自己と他者のあいだには、いかなる意味においても隔たりがある。それが共にということの真の意味である。……「自らに触れる」とき、つまり自己を反省の光にもたらずとき、つねに脱自の働きによって、時間的、空間的なずれがもたらされる。これを言いかえれば、触れられるものと触れるものとは同一ではなく、他なるものによって触れられているということである。……こうして、デリダはナンシーとともに、脱自つまり時間・空間的なずれをもたらず働きが、自己性の痕跡を残すと同時に他者性を呼び込むことを明らかにする。……ナンシーは、このような自己性と他者性の同時発生（共現前＝出頭）<sup>21)</sup>が、共同体の可能性の条件であるという。

デリダが「文化の固有性は自己自身と同一でないことである」<sup>22)</sup>と言うような共同体のあり方をこの二枚橋(2)遺跡の土面群もまた物語っているのであり、それはとりもなおさず、共同体の祖霊など、同一の精霊に対するイメージが共同幻想として成立するさいに、どの程度の観念の個体差を包摂するかたちで存立し得るものなのか、その観念の構成の具体的なあり方を指し示しているものなのである。勿論、そのような分有を通して絶え間なく差異化が引き起こされるからこそ、それを埋めるかのように同一化の欲求が喚起され、理念型としての型式が同質なアイデンティティとして想起されていく点も見落としてはならない。

一方で、このような共同体の分有は、当然のことながら、仮面に現れる精霊の観念を単一のアイデンティティとして構築されているものではなく、我々の日常がそうであるように、様々な観念の複合体として成り立っている。その複合体の構造は、亀ヶ岡文化の場合においてもその宗教的遺物をめぐる組成の多様性が示しているように、固定された静止的な構造ではなく、型式という同一性への欲求を梃子としながら、差異がさらなる差異を生み出す力動的な複雑性に満ちたものである。このような複合的な観念構造を網羅的に理解することは、報告書や論文を通して個々の遺跡の特質や個々の遺跡の関係性としての地域性の構造を把握していくことにほかならないが、土面を主題とする本稿においては二枚橋(2)遺跡での土面と土偶の関係、より具体的に言えば第IV B-1層出土の資料に限定して、その構構性の一部について言及しておきたい。



#### 4 遺跡における遺物組成(2)—土面と土偶のあいだ

別稿で指摘したように、亀ヶ岡文化の宗教構造は形態・材質・文様表現の三要素の特質を交差させることで、土製仮面・土偶・岩偶・石棒や岩版・土版のような諸形式を成立させたと考えられる。<sup>23)</sup> そのなかで、土偶と土面は同じ土製の身体表現をとる遺物でありながらも、五体完備したものであるか、顔面のみの表現であるかという点で異なる。しかし、そのような両者の区別、すなわち土面は土面、土偶は土偶として明確に区別されたうえで、両者のあいだには密接な関係性もまた存在する。すなわち、土偶における仮面型土偶の存在である。これは、いわゆる仮面を装着した状態の土偶の存在を意味するものではなく、仮面と共通した顔部を有する土偶が存在するということである。第IV B-1層の資料としては図3-4が、他の地層から出土したものとしては図4のものが相当すると考えられる。なお、頭部だけの土偶片を含めると、二枚橋(2)遺跡からは土面との類似を思わせる土偶が上記の資料以外にも幾つも発見されており、土面の出土数に比例するかのように、土面と共通する土偶（本稿で言う中実b形土偶）の出土数も他の遺跡よりも多いことが見て取れる。

ここで、まず第IV B-1層から出土した土偶の諸型式を確認しておきたい。立像土偶としては、中空遮光器a形土偶（図3-1・2）、中実遮光器形土偶（図3-3）、腰のパンツ状文様以外は無文の中実a形土偶（図3-15）、岩版・土版（図3-17・18）と同じ体部文様を有する中実b形土偶（図3-4）、x字形土偶（図3-8・9）、省略形土偶（図3-11）などが存在する。その他に、中実a形土偶の身体を屈曲させたものが屈折像土偶第一類（図3-6）・同第二類（図3-7）とともに存在する。また注目されるのが、x字形土偶の形態と岩偶の文様を配した土偶の存在（図3-5）である。<sup>24)</sup> x字形土偶と岩偶の両形式が交差することは珍しい例であるが、このようにして諸形式・型式は明確に区別されたうえで様々なかたちで交配を繰り返し、いずれも少数例ながら、新たな形式・型式を次々と生み出していく力動性を有するものなのである。一方で、石剣（図3-16）の亀頭部文様が土偶に施文されることはなく、すべてが交配されるのではなく、排他的な作用も意図的に働いていたことを見逃してはならない。<sup>25)</sup>

土面と土偶の関係についても、このような交配の作用から生み出されたものと考えらるこ

表2 亀ヶ岡文化における立像土偶・屈折像土偶・土面の形式関係

立像土偶	屈折像土偶	土面
中空遮光器 a 形土偶		
中空遮光器 b 形土偶		+
中実遮光器形土偶		
中実 a 形土偶	+	
中実 b 形土偶		+
x 字形土偶	+	
省略形土偶	+	

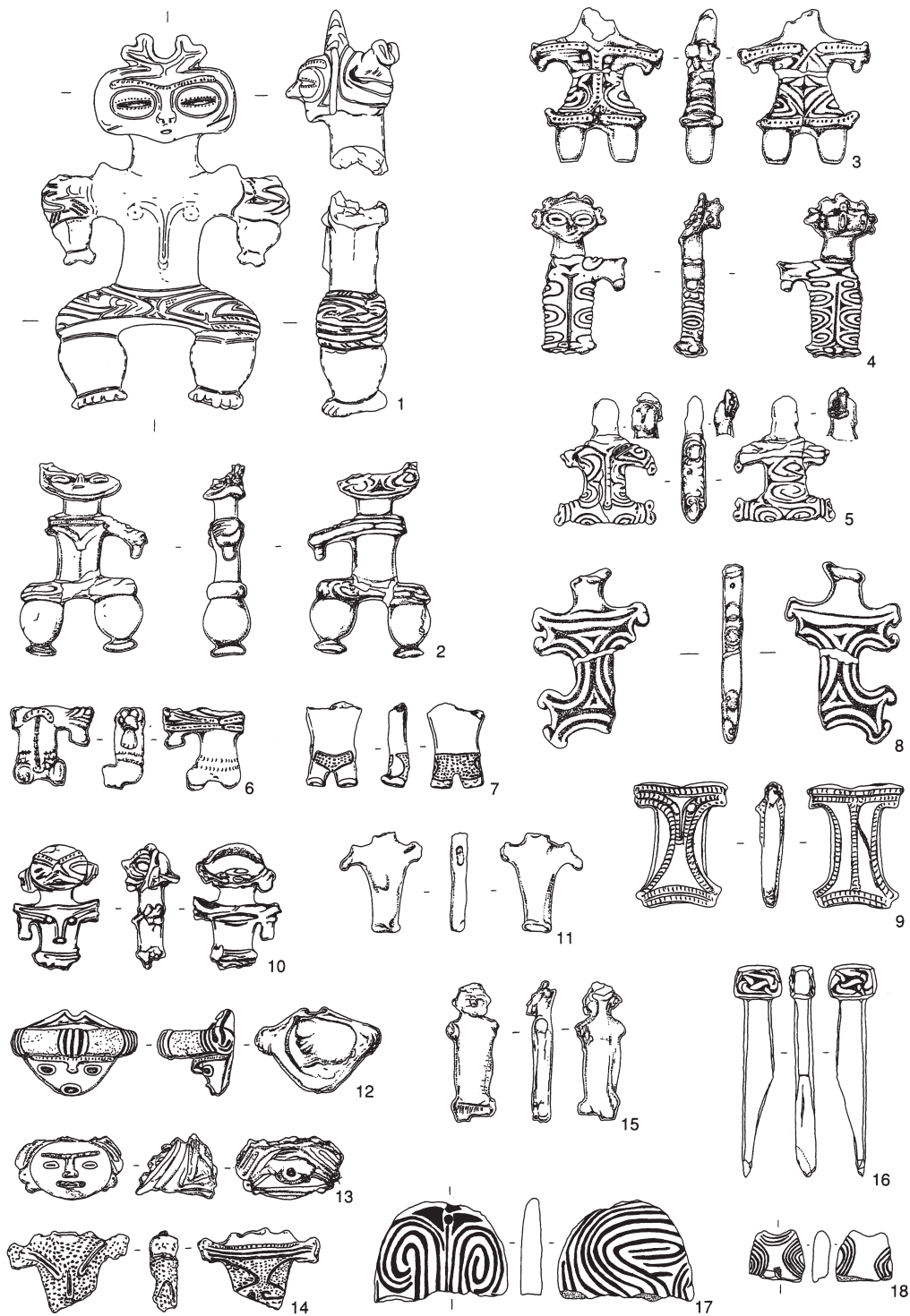


図3 二枚橋(2)遺跡第ⅣB-1層出土の土偶その他〔大畑町教育委員会 2001〕を改変

とができる。そのなかで第ⅣB-1層から出土した遮光器型第一類土面の特徴を持つ土偶(図3-4)は、無文帯ではあるが広い額部、遮光器と言っても上辺部のみの眼帯、その眼帯から伸びた写実的な鼻、尖った顎、B突起で表現した耳部をもつ点で、遮光器型第一類土面の特徴を共有する。そして、板状の後頭部の中央にもB突起が縦位に施文され、



図4 二枚橋(2)遺跡出土の中実b形土偶(大畑町教育委員会 2001を改変)

肩の張った板状の体部には岩版・土版と共通する文様が施文されている。他の地層から出土した資料(図4)についても、上辺部のみの眼帯、その眼帯から伸びた写実的な鼻、尖った顎といった共通点に加え、それぞれに個性を有するかたちで、B突起状耳部の存在(図4-1・3・4)、頬部への三叉文状の削り込み(図4-1・3・4)、後頭部の突起の存在(図4-1・3・4)、体部への岩版・土版文様の施文(図4-1~3)など、中実b形土偶の特徴が見て取れる。また、第IV B-1層出土の資料も含めて、1点(図4-1)を除けば、いずれも朱彩が施されている点でも二枚橋(2)遺跡の土面との共通性が確認される。念のために言えば、ここにみられるような個性もまた、この遮光器型土面と土偶が結びついた中実b形土偶という同一型式の分有をめぐる個人差から生じたところのものであり、当時の共同性構築のあり方を反映するものとして理解されるべきである。

また、第IV B-1層出土の土偶もまた土面の場合と同じように、単一時期の型式から構成されるものではなく、上記であげたような大洞C1期から同C2期の資料に加えて、大洞A期から同A期のもの(図3-10・12~14)までが含まれている。おそらく、大洞C2期以降の土偶組成においては、上述のような大洞C1期までの土偶型式間の細かな区分が崩れていき、幾つもの型式が合一していったと考えられる。そのなかで注目されるのが、遮光器型第二類土面と類似した顔部特徴をもつ土偶(図3-13)である。遮光器形土偶の流れを汲む資料と考えられるが、口唇部の左右に張り出した三角の隆起帯が土面特有の表現であるところから土面の顔部表現を取り込んだことが推察される。ただし、後頭部が板状ではなく、中空形態をとる点からみれば、二枚橋(2)遺跡出土の他の資料のように中実b形土偶の系譜を引くものではなく、青森県宇鉄遺跡や岩手県軽米遺跡出土の資料のように、土面の顔部を有する中空遮光器b形土偶の流れを汲むものと考えられる。場合によっては、晩期後葉には中空遮光器a形土偶と中空遮光器b形土偶の区別も消滅してしまった可能性も考えられよう。

## 5 おわりに

以上、二枚橋(2)遺跡の例から、土偶型式がいかに細分化された型式組成を有するものか、そのなかで土面の顔部を有する土偶が他型式の土偶の体部文様と区別されたかたちで選択的に固有の型式内容を備えたものとして存立していたことが確認されたことと思われる。このような土偶や土面をはじめとする宗教遺物の複合的構造の存在は、二枚橋(2)遺跡の母体をなす共同体の神観念がいかに多様で構造化された内容を有するものであったか、そして土面に象徴される精霊のイメージがそのなかで固有の場所を占める差異化されたものであったことを明示している。このような複雑な多様さは当時の社会を生きる人々の観念世界の豊かさを物語るものにはかならないが、その一方でその複合的な観念世界が一つの共同幻想として人々に分有され、自分たちが同一の世界観を共有しているという強固な信憑性ととともに、その同一性が個々の構成員のもとに個別化されていくという複雑な観念構築のあり方を二枚橋(2)遺跡の遺物組成は我々に指し示してくれているのである。このような分析の方向のなかから、型式という理念型のもつ同一性の記述が、個別の遺跡の発掘例によって個々の共同体の構築過程へと脱構築され、さらに個々の遺跡の分析例が組み合わされることで、共同体間の人や物の移動を通して、より広汎な地域の構造性がいかに構築されていったのかを、これから解明することが可能になっていくことであろう。

このような理解に立つときに、従来の考古学の記述が一方で型式学に立脚した理念化された文化同質論と、他方で各遺跡の報告にもとづく記述の個別性のあいだで揺れてきたことに我々は気がつくことになる。冒頭に触れたプラットも含め、複数文化接触という考え方を我々がとるときには、理念化された複数の同質な文化を想定したうえで、その接触によってそれぞれの同質性が侵食されていくという立場をとるわけであるが、そのような文化の同質性そのものが考古学で言えば型式学という同質性を抽出するための作業によって理念型として作り出されたものであった。現実の異文化接触は、文化の中心から周辺に向かって一方的に起こるものではなく、むしろそれぞれの遺跡において、具体的な生活の場において至るところで異文化要素の接触を引き起こすものであった。同質な文化とは、そのような日常の差異に満ちた空間から、理想的同質性として想起される観念の領域において生起するものであり、その観念的同質性が人々の共同性を紡ぎだす役割を果たしてきたのであった。逆の言い方をすれば、日常的生活の場とはそのような観念的同質性を個々の差異のもとに分節化していく場なのである。そのような同一性と差異のもとで、例外なくあらゆる場所で引き起こされる文化接触の現場のもとで、人々は互いの他者性を引き受けながら共同性を構築する試みを行い続けてきたのだと言えよう。

### 注

- 1) Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*, London and New York: Routledge, 1992. なお、この著書の今日理解については、下記の論文から示唆を得ている。田中雅一「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む』『Contact Zone』1: 31-43, 2007年。

- 2) その後、「縄文社会の仮面」と改題して、磯前順一『土偶と仮面——縄文社会の宗教構造』校倉書房 1994年、に収録。
- 3) 伊藤正人「顔の輪廻——土偶と土面の西東」『古代学研究』168 2005年、30-31頁。その他に資料集成として、中山潔「化身の祭り」大阪府立弥生文化博物館編『縄紋の祈り・弥生の心——森の神から稲作の神へ』1998年、51頁、金子昭彦「東北地方北部における縄文時代の土面」『縄文時代』12 2001年、122-127頁、藤沼邦彦・佐布環貴・萩阪華恵「青森県における縄文時代の土製仮面について」『青森県史研究』6 2002年、139-140頁。磯前論文〔1994a〕以降の研究史については、伊藤論文 27-32頁。なお、本稿で言及する文献は、拙稿「縄文社会の仮面」では未掲載であった資料に関するものを中心とする。
- 4) 島津義昭「縄文時代の貝面——熊本県阿高貝塚の出土品を中心として」『平井尚志先生古希記念考古学論叢第Ⅱ集』郵政考古学会 1992年、山崎純男「海人の面——九州縄文時代精神文化の一側面」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会 2001年、水之江和同「仮面形貝製品について」『環瀬戸内海の考古学——平井勝氏追悼論文集 上巻』古代吉備研究会 2002年。
- 5) 氏家敏之「矢野遺跡出土の土製仮面」『考古学ジャーナル』422 1997年、徳島県埋蔵文化財センター編『矢野遺跡(Ⅱ)(縄文時代篇) 第一分冊』2003年、369・378頁。後期前葉とされる資料については、大阪府縄手遺跡出土の資料として、菅原章太・松川由次「収蔵庫から出てきた土製仮面」『縄文時代』14 2003年。大阪府仏並遺跡および滋賀県正楽寺遺跡のものとして、大野薫「仏並土面の再検討」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 1995年、能登川町教育委員会『正楽寺遺跡本文編』1996年、144頁。
- 6) 茨城県教育財団編『大橋B遺跡・釈迦才仏遺跡』1998年、72頁、宮田裕紀枝「本遺跡出土の土製仮面(土面)について」『利根川』18 1997年。なお、千葉県南羽鳥中岬第一遺跡では、縄文時代前期後半の墓抗から人頭形土製品が出土しているが、現時点では、その後に出現する後期の土面との関連を想定することは困難である。印旛郡市文化財センター編『千葉県成田市南羽鳥遺跡群』1997年、192-196頁。
- 7) 島津前掲「縄文時代の貝面」21頁、山崎前掲「海人の面」11頁。
- 8) 青森県虚空蔵遺跡のもの(藤沼他前掲「青森県における縄文時代の土製仮面について」図29 117・127-128頁)は、馬淵川流域のものであり、仙台湾を中心とする後期仮面の分布域の理解を見直させる可能性を有する。
- 9) 安孫子昭二「遮光器土偶の曙光——青森県宇鉄遺跡出土の土偶について」『土偶研究の地平3』勉誠社 1999年、327・334頁、金子前掲「東北地方北部における縄文時代の土面」129頁。一方、本堂寿一は八天遺跡出土資料の伴出土器から後期後半を示唆している。本堂寿一「八天遺跡の仮面」『北奥古代文化』25 1996年、30頁。
- 10) 石原正敏・木村祐治「新潟県新津市原遺跡の耳形土製品」『縄文時代』7 1996年、長野県御代田町教育委員会編『滝沢遺跡』1997年。
- 11) 山崎前掲「海人の面」。
- 12) 栃木県教育委員会編『寺野東遺跡V』1997年、631頁、茨城県史編集委員会『茨城県史料 考古資料編(先土器・縄文時代)』1979年、茨城県史編集委員会「縄文時代土偶・土製品実測図集成2-2」『茨城県史料 考古資料編(先土器・縄文時代)』1979年、467頁。
- 13) いわき市教育委員会『愛谷遺跡』1985年、図V-537-1。
- 14) 大畑町教育委員会編『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』2001年。
- 15) 大塚達朗『縄紋土器研究の新展開』同成社 2000年、56頁。
- 16) 同一性の型式と差異性としての個別遺物のあり方の関係については、磯前順一「土偶論の視座——型式学の脱構築」『講座日本考古学』青木書店 近刊。
- 17) この部分は下記の拙稿をもとにしている。磯前順一「土面」青柳正規・西野嘉章編『東京大学コレクション1 東アジアの形態世界』東京大学出版会 1994年。
- 18) 多くの発掘例がそうであるように、二枚橋(2)遺跡もまた全面発掘ではなく、発掘の施行以前に

遺跡の一部が工事等によって削除されてしまっていた。その点からみれば、鼻曲がり型土面をふくめてさらなる土面が本来は保有されていたとも考えられる。

- 19) ジャック・デリダ&ジョン・D・カプート編『デリダとの対話——脱構築入門』1997年（高橋透他訳、法政大学出版局、2004年、160頁）。
- 20) ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』1986/1999年（西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001年、48頁）。
- 21) 松葉祥一「[共通性なき共同体]は可能か」『現代思想』32(15) 2004年、165頁。
- 22) デリダ&カプート前掲書(171頁)。
- 23) 磯前前掲「土偶論の視座」『土偶と仮面』。
- 24) x字形土偶の形状については、熊谷常正「x字形土偶」『季刊考古学』30 1990年。岩偶の文様については、稲野裕介「岩偶」『縄文文化の研究9』雄山閣出版 1983年、同「遺物研究 岩偶」『縄文時代』10 1999年。
- 25) 石剣の文様については、稲野裕介「亀ヶ岡文化における石剣類の研究——文様に基づく分類」『北奥古代文化』11 1979年。稲野は石剣亀頭部の文様を六種類以上に分類しており、ここにあげた二枚橋(2)遺跡出土のものは第一類に相当する。一方で稲野があげる第五類は遮光器形土偶の後頭部文様に時折施文されるものであり、ここでも同様に選択的な共有がみられる。
- 26) 宇鉄出土の土偶については、安孫子前掲「遮光器土偶の曙光」。軽米出土の土偶については、磯前前掲『土偶と仮面』、80-81頁。

#### 参考文献

- 安孫子昭二 1999 「遮光器土偶の曙光——青森県宇鉄遺跡出土の土偶について」『土偶研究の地平3』勉誠社。
- 石原正敏・木村祐治 1996 「新潟県新津市原遺跡の耳形土製品」『縄文時代』7:113-118。
- 磯前順一 1994a 「縄文社会の仮面」『土偶と仮面——縄文社会の宗教構造』校倉書房。
- 1994b 「土面」青柳正規・西野嘉章編『東京大学コレクション 1 東アジアの形態世界』東京大学出版会。
- (近刊) 「土偶論の視座——型式学の脱構築」『講座日本考古学』青木書店。
- 伊藤正人 2005 「顔の輪廻——土偶と土面の西東」『古代学研究』168:19-39。
- 稲野裕介 1979 「亀ヶ岡文化における石剣類の研究——文様に基づく分類」『北奥古代文化』11:10-17。
- 1983 「岩偶」加藤晋平他編『縄文文化の研究9』雄山閣出版。
- 1999 「遺物研究 岩偶」『縄文時代』10:139-146。
- 茨城県教育財団(編) 1998 『大橋B遺跡・釈迦才仏遺跡』。
- 茨城県史編集委員会 1979 『茨城県史料 考古資料編(先土器・縄文時代)』。
- いわき市教育委員会 1985 『愛谷遺跡』。
- 印旛郡市文化財センター(編) 1997 『千葉県成田市南羽鳥遺跡群』。
- 氏家敏之 1997 「矢野遺跡出土の土製仮面」『考古学ジャーナル』422:40-42。
- 大野 薫 1995 「仏並土面の再検討」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3:15-23。
- 大塚達朗 2000 『縄文土器研究の新展開』同成社。
- 大畑町教育委員会編 2001 『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』。
- 金子昭彦 2001 「東北地方北部における縄文時代の土面」『縄文時代』12:122-127。
- 熊谷常正 1990 「x字形土偶」『季刊考古学』30:42-46。
- 島津義昭 1992 「縄文時代の貝面——熊本県阿高貝塚の出土品を中心として」『平井尚志先生古希記念考古学論叢第Ⅱ集』郵政考古学会。
- 菅原章太・松川由次 2003 「収蔵庫から出てきた土製仮面」『縄文時代』14:155-166。
- 田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。

- デリダ, ジャック & ジョン・D・カプート (編) 2004 (1997年) 『デリダとの対話——脱構築入門』  
 (高橋透他訳) 法政大学出版局。
- 徳島県埋蔵文化財センター (編) 2003 『矢野遺跡 (Ⅱ) (縄文時代篇) 第一分冊』。
- 栃木県教育委員会 (編) 1997 『寺野東遺跡Ⅴ』。
- 長野県御代田町教育委員会 (編) 1997 『滝沢遺跡』。
- 中山 潔 1998 「化身の祭り」大阪府立弥生文化博物館編 『縄紋の祈り・弥生の心——森の神から稲作の神へ』, 48-51頁。
- ナンシー, ジャン＝リュック 2001 (1986/1999年) 『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』  
 (西谷修・安原伸一朗訳) 以文社。
- 能登川町教育委員会 (編) 1996 『正楽寺遺跡 本文編』。
- 藤沼邦彦・佐布環貴・萩阪華恵 2002 「青森県における縄文時代の土製仮面について」『青森県史研究』6:108-139。
- 本堂寿一 1996 「八天遺跡の仮面」『北奥古代文化』25:29-33。
- 松葉祥一 2004 「「共通性なき共同体」は可能か」『現代思想』32 (15):162-169。
- 水之江和同 2002 「仮面形貝製品について」『環瀬戸内海の考古学——平井勝氏追悼論文集 上巻』  
 古代吉備研究会, pp. 185-194。
- 宮田裕紀枝 1997 「本遺跡出土の土製仮面 (土面) について」『利根川』18:25-28。
- 山崎純男 2001 「海人の面——九州縄文時代精神文化の一側面」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会, pp. 1-20。
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and New York: Routledge.